

おなかからキズ

高知 四年 そら

夜、おじいちゃんが、

「おふろ入ろうか。」

と言った。ぼくは、

「うん。」

と言った。

おじいちゃんとおぼくははだかになった。

おじいちゃんのむねの間からおへその上まで長細いあどがあった。

ぼくはびっくりした。ぬったあどと思った。

「おじいちゃん、そこのおなかの所どうしたん。」

と聞いた。おじいちゃんは、

「これか、これはな、戦争って知ってるか。」

と言った。ぼくは、

「知ってるよ。」

と言った。おじいちゃんが、

「わしはな、戦争にあつてな。生きてたんじゃ。こわかったな。」

と言った。ぼくは、

「なんでこわかったん。」

と言った。おじいちゃんが、

「大きなばくだんが落ちてきて、人が何人も何人も死んでおそろしく

てこわかったんじゃ。」

と言った。ぼくは、

「戦争はきらい。」
と言った。

おじいちゃんとおぼくは服をぬいだ。おじいちゃんがドアを開けようとした時、ぼくが、

「言い忘れていた。なんでおなかぬってるの。」

と言った。おじいちゃんは、

「いっかいおなかに何かがあたってぬっているの。」

と言った。ぼくが、

「その時いたかったろう。」

と言った。おじいちゃんは、

「いたかったよ。」

と言った。

おじいちゃんといっしょにおふろに入った。

おじいちゃんは子どもたちのころに戦争にあって、どこかでかくれて生きていたそうです。ぼくぐらいの年だったそうです。ぼくは、おじいちゃんこわかっただらうなと思いました。



(指導 山本真紀子)